



- 赤猫 -

恣意 セシル

「あっ」

突然の突風に煽(あお)られ、咄嗟に目を閉じた。

次に目を開いたとき視界に移ったのは、真っ青な空を背景に舞う、赤い、――一際赤い、一片

。

季節は霜月。がさがさと空気は乾燥し、吹く風がいちいち辻斬りのように感じられる寒い日。葉をすっかり落とした侘しい風情の木や砂っぽい景色の中で、花卉のようにも見えるそれは私の爪先に塗られていたエナメル的一片だった。

ほんの一瞬、鮮やかな赤色を目に焼き付けて空の彼方に消えていく。

意味もなく毛羽立ち、ささくれ立った心をもてあまして、私はその空をずっとずっと、見つめていた。

別れは唐突だった、と思う。私にとっては。

夜、部屋の中。窓越しに入る瓦斯(ガス)燈(とう)の白い光が目には痛かった。

六畳一間の家は大きな窓が通りに面していて、夜は部屋の電気をつける必要がないくらい沢山の光が注ぎ込む。

蠟燭も油も高かったから、夜更かしをするときなどはいつも、障子越しに透ける余りある光をありがたく享受していた。

「アカネ」

裸のままで毛布に包まり横たわっていた私を、彼一スイが呼ぶ。

いつもなら私の中から自分を引きずり出した後そのまま寝てしまうのに、その日はどういう訳か体育座りをして、私のことを見下ろしていたのだ。

「どうしたの」

寝転がったまま見上げた彼の顔は影になっていて、

外からの灯りを受け止め鈍く光る瞳だけが光って見える。小刻みに揺れるそれは海のように深くて暗い。

「手、出して。爪を塗ってあげる」

かつて絵描きを志していた彼は、その延長線上としてよく、私の爪にエナメルを塗ってくれた

。

今は諦めて画商の見習いをしていて、いつか認められ、巴里(パリ)への買い付けに同行するのが目標なんだとよく言っていた。

美術学校の学生だった頃に一度行ったことがあるけれど、夢で曇っていない目でもう一度、憧れの町を見たいのだと。

「十一月はさあ、赤色って感じがするよね」

赤、青、桃、緑。籠の中から色とりどり、選び出しながら彼が呟く。

エナメルは高級品で塗っている人は滅多にいなかったけれど、彼に塗ってもらうのが嬉しくて

、

どうせならいろんな色を自由に選んでほしくて、お金を少しずつ貯めては買い揃えていた。

「シクラメン、あれ、好きなんだけど。十一月は特に綺麗に咲くように思うんだよなあ」

紅(べに)赤(あか)、深(こき)緋(ひ)、猩々(しょうじょう)緋(ひ)。手の中は赤色ばかり。

「シクラメンで、篝火みたいに見えるからさ、カガリビバナって言うんだよ。知ってる？」

長いこと一緒にいるけれど、こんなによく喋る人だっただろうか。

白々した冷たい光の中、彼の言葉が私の心の表面を上滑りしていくような感じがする。

小さな違和感がちよつとずつ、ちよつとずつ、積み上がっていくような。

そうやって、気づけば世界が知らない形に変わってしまったような。

彼の表情はやっぱり見えない。手首を掴む手が熱い。

私は、彼に何かを言うべきなんじゃないかと思いながら、

しかし、彼と繋がった後の余韻でまだ頭がぼんやりしていて、何をどう言えばいいかわからなかった。

「スイ」

どうしようもなく、ただ名前を呼ぶ。

「ほら、もっと指、ぴんと伸ばして」

それに答えず、彼は左手で私の手の甲を掴んだまま、右手だけで器用にエナメルの蓋をくるくると回して空け、そのまま私の爪に色を乗せ始めてしまった。

すうっと、胸をひっかくような冷たさが指の先から体の真ん中へ向けて注がれる心地。

「しっかりして。震えるなって」

液をたっぷりと含ませた筆が、躊躇いなく動く。外にはもう走る車もなく、出歩く人もいない。

水底のように静まり返った部屋の中で、私もスイも息をすることさえ忘れ、ただ赤く色づいていく指先を見つめていた。

「ちょっと、シクラメンの赤より暗かったかな」

塗り終わった爪に息を吹きかけながら、彼は少し疲れた顔で微笑んでいた。

「ほら、綺麗に塗れた。乾くまでじっとしてろよ」

湿り気のある温かい呼気に、とても眠くなったのを覚えている。

微妙な違和感を感じながら、それでも私は色々なことを信じて安心しきっていたのだ。もう二度と戻ってこない、穏やかな雰囲気の中で。

――スイから別れを告げられたのはそれから三日後のこと。

両親から勧められた縁談があって、それを受けるとにしたと。

だから国に帰るからと、事務的で拒むことはおろか、厭がる隙さえない、一方的な話だった。

「お金持ちのお嬢さんで。何がいいんだか知らないけど、結婚したらなんでも自由にしていって言うんだ。

.....好きなだけ、絵を描いていいって。働かなくていいって。そう、言われたんだ」

どうしようもなかった。彼が手に入れようとしているものは、私がどうしたって与えられるものではなかった。

私はしががない洋食屋の給仕に過ぎない。一緒にいる限り、彼は毎日休みなく働かなくてはいけないだろう。

自分の時間を自由にできるようになるには、もっともっと、もっともっと、時間とお金が必要だ。

彼はどんな気持ちで洗いざらいの事情を告げ、去っていったんだろう。

どうして心の皮膚を抉り、二度と消えないであろう傷を残すような真似をしたのだろう。

途方に暮れて、暮れすぎて、私はずっと、迷子のまま。